

『次の日、議員、長老、律法学者たちがエルサレムに集まった。6 大祭司アンナスとカイアファとヨハネとアレクサンドロと大祭司一族が集まった。7 そして、使徒たちを真ん中に立たせて、「お前たちは何の権威によって、だれの名によってああいうことをしたのか」と尋問した。8 そのとき、ペトロは聖霊に満たされて言った。「民の議員、また長老の方々、9 今日わたしたちが取り調べを受けているのは、病人に対する善い行いと、その人が何によっていやされたかということについてであるならば、10 あなたがたもイスラエルの民全体も知っていただきたい。この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです。11 この方こそ、『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、隅の親石となった石』です。12 ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」13 議員や他の者たちは、ペトロとヨハネの大胆な態度を見、しかも二人が無学な普通の人であることを知って驚き、また、イエスと一緒にいた者であるということも分かった。』(使徒言行録4章5-13節)

今日の聖書の言葉では、イエスさまの弟子たちが議会に呼ばれて、取り調べを受けているところが記されています。ペトロやヨハネといった弟子たちは、イエスさまの名前によって人々を教えたり病気を癒したりしていました。しかし、議会を構成する民の指導者たちは、そのことをとても嫌いました。それはなぜかと言いますと、イエスさまの名前を出されること、その教えを広められることが、彼らにとってとても都合が悪かったからです。イエスさまの名前によって教え活動する弟子たちは、たくさんの人々を癒したり救いに導いていましたが、しかし、一方で彼らは人々を救いに導くことは出来ないでいました。それでも、その指導者としての椅子を他の人に譲ることをせずに、そのままその立場に座り続けていたのです。「このままでは、自分たちの地位が奪われてしまう、何とかしてイエスの名に連なる者たちが活動することをやめさせなければならない」そうあせった彼らは、イエスさまの弟子たちを捕まえて議会で厳しく圧力をかけて脅したのだというわけです。

本来なら、多くの人々が救われること、癒やしや苦しんでいる命が回復されることこそが、彼らにとってもその役割の目的であったはずですが、しかし、長い年月の間その指導者の地位に就いていることによって、当初の目的を見失ってしまいます。自分たちの地位や権力そして財産を、いかに守ったり増やすのかといったことが彼らの関心ごとになってしまっていました。イエスの名によって働く人々によってまことの救いが人々にもたらされているのなら、彼らもイエスさまに学びそれに習えば良かったのです。しかし、彼らはイエスさまを拒絶してしまい、その教えを受け入れる代わりにその名を滅ぼすことを選んでしまいました。特にここでは、いったい何が救いをもたらせなくしているのかの要因を、彼らを反面教師にして学びたいと思います。そして、どのようにしてイエスの名に属する者たちが、そこから改善してい

ったのかを比較しながら確かめたいと思います。

ここに出てきます指導者たちの中で、一番権限を持っているのは大祭司でありました(6節)。当時の実際の大祭司はカイアファですが、その義理の父であるアンナスが、実質的な権力を持っていました(日本でいえば院政のような状況)。そのアンナスを中心に彼の一族が重要な役職を独占していて、彼ら一族の意見が常に議会に於いて力を持っていました(日本でいえば「平家であらざんば人にあらず」の状態)。ですので、その意見が正しいか正しくないかは二の次です。人々の救済のために、健全に信仰の事柄が議論されているのかは問われなくなってしまいます。それよりも、アンナス一族の機嫌を損ねないことを一番にして議会の営むようになってしまうのだというわけですね。こうなってくると、信仰共同体を改革しようとしても誰も手が出せない状態に陥ってしまいます。

その一族の絆が神との繋がりを壊してしまう問題を、イエスの名に属する人々、教会は、いったいどのようにして解決していったのでしょうか。イエスさまがおっしゃった言葉に、次のようなものがあります。「わたしの母、わたしの兄弟姉妹とは誰か。わたしの母、わたしの兄弟姉妹とは、神の言葉を聴いてそれを行う人たちのことである」(ルカによる福音書 8 章 20-21 節)ここに、イエスさまが家族というものをどう考えていたのかが良く現されています。イエスさまは、血のつながりや婚姻関係よりも、まず神との繋がりと神との契約関係を何よりも優先しています。たとえ親子であっても、夫婦であっても、そこに神の御心を何よりも優先しようという姿勢がなかったのなら、神との繋がりは途絶えてしまいます。例えば、一つ例を挙げてみます。以前はとてもみ言葉に対して誠実で、自らの利益を求めるようなことはなかった牧師がいたとします。しかし、結婚して子どもが何人も出来てからというもの、何かと自分の家に得になることを教会の中で得ようとしたり、そちらの方に教会を誘導し始めたりしたらどうでしょう。それは、程度の差こそあれど、アンナス一族が行ったことと性質は同じでして、実質的にはイエスの名によって教会を営んでいないことになってしまいます。菊田家だったら菊田の名による集団であるわけで、そうなったらイエス・キリストの教会ではありませんのでキリストの救いの力が働くことはないのだということです。「乗っ取り」という言葉がありますが、人々の救いや癒やしが教会で起こらないのは、もしかすると人間の誰かがイエスの名の教会を乗っ取っているからかもしれません。そうなってしまったらキリストの救う霊、聖霊が働かないのは当然ですね。これは、どこということではなくどの教会においても、本当の意味でイエスの名によって教会が営まれているのかを、アンナスたちを反面教師にすることで自己点検する必要があると思います。気がついていなかったけれど、実はイエス・キリストを石ころのように捨ててしまっていたということが大いにあり得ます。何度でも低く謙虚になって、ペトロたち最初の使徒たちがどのようにしてそのような信仰共同体の危機を乗り越えていったのかをよく学ぶことが大切ですね。

おそらく文字も読めなかった漁師だったペトロが、聖霊に満たされて最高権力者たちと堂々と渡り合っている姿が、ここには生き生きと描かれています。そのことが可能だったのは、人間の家系や血筋といったことによるのではなく、神の言葉を聴いてそれを行うというこ

とに、彼らが従順に従っていたからです。彼らは能力がそんなにあったわけではないでしょう(13 節)。ペトロやヨハネたちは、一枚も文書を残していませんので、おそらく生涯文字を読んだり書いたり出来なかったと考えられています。しかし、その代わりに家族や自分と繋がりが深い人々を特別扱いして、権限を独占するようなことは一人もしませんでした。どこかの大きな教会に留まり続けることもなく、下着を 1 枚しか着ないというイエスさまと福音伝道をしていた頃と変わらぬ姿で、地の果てを目指して福音を伝えることに生涯を捧げたのです。そのようなみ言葉を真に生きる姿を通して、彼らは本当の意味で皆に信頼されました。人とのコネや土地とのしがらみがありませんでしたので、彼らは自由に指導者として誰に対しても公平に振る舞うことができました。つまり、偏ってどこかが大きくなり、どこかが小さくされるということがないように、公平さを何よりも優先することが、彼らの教会建設の生命線となったのです。まさに、ここに聖霊の働き、器と彼らになっていることの証拠があります。逆に恐れによったり、数の力で強引に人々を従わせようとするのは、聖霊によっていないことを、イエスの名前に属していないことを、自ら証明してしまっているのです。ペトロたち使徒たちは、「自分の名前よりイエスさまの名前が褒め称えられて欲しい。」「神の言葉に誰よりも従順に生き抜いたイエスさまのその名前を、決して辱めたくない！」という方向に向かったので、人々の救いや癒しをもたらす信仰共同体を建てるのが出来たのです。

イエスの名に属する教会の教職制度として、多くの教会ではアンナスたちを反面教師にして「終身制」を止めています。それは、教職が神の御心から逸れたら、いつでも代わられるようにするためです。そして「世襲制」もやめています。どこどこの牧師の息子や娘が、父や母が牧会していた教会を継いだというのはあまり聞いたことがないと思います。それは、イエス・キリストとの繋がりよりも、牧師の血筋の人々との繋がりが強くなってしまい、牧師が崇められるようにならないようにするための聖書の知恵です。牧師も信徒も信仰者というものは、受洗後において、み言葉を聴いてもそれを行わない試みにいつも晒されています。聖書を読んでも、その言葉を聴いても聴かない、見ても本当には見ていないという危険がついてまわっているのです。残念ながら、イエスの名において営んでいるはずの教会で、アンナスたちと同じような姿の教会が少なからず存在しています。終身制かと勘違いするほど、何十年も同じ教会に居続ける牧師がいます。幼稚園や保育園などの教会の付帯施設の理事職や役職を、牧師一族が独占しているケースでいえば、どの地域に行っても見つけることは比較的簡単です。このような状況が野放しになっていて、「どうしてキリストの福音が伝わらないのだろうか？」と言っているのだとしたら、とても滑稽ではないでしょうか。それは、適正に福音を伝えた上で人々から捨てられたのではなくて(11 節)、自らがキリストを捨ててしまっているからです。イエス・キリストの名による救いが起こらないのは、実質的にイエスの名において福音を伝えていないからです。これらは教職だけでなく、信徒にも責任があります。「神に従わないで、人間のあなたに従うことはわたしには出来ません」(19 節参照)と、一人一人の信仰者がみ言葉に根ざして立っていないと、教会は容易に流されて行ってしまいます。

聖書を読むとき、イエス・キリストを中心に読むことが大切です。イエスさまは、人々に捨て

られるご生涯を歩まれましたが、そこから逃れることをしませんでした。むしろ、孤独で地位も名誉も財産とも縁のない道に行くことに、喜びを見いだしていたのです。そのことで返って神に拾われ、真に人々の心を捕ることの出来る漁師と天の父はなられました。そのイエスキリストの名前に属するという事は、この貧しさを楽しみ、喜べる心の方向に向きを変えろということだ。人々に捨てられようが、それもおかまいなしで、心が折れずに平気でいられるという状態こそが、この世界で最も自由な人間ではないでしょうか。自分さえも自らに期待出来ないような状況におかれても、それでも自分を越えた存在に期待することでなんとか苦境を乗り越えて行けるのが、実は一番強いのです。それぞれの持っている罪深さや、死ぬという人の限界を超えた領域に権限を持っておられるのはただ唯一、神だけです。その神と深く繋がることこそ、救いですね。そのような、イエスキリストの名前によって与えられる救いを、一人でも多くの人々にもたすために教会は存在しています。先の人たちである信仰者が、真にイエスキリストの名による救いに留まることがなかったのなら、後の人たちにイエスキリストの名による救いをもたらすことが出来ません。ですので、教会を営むということは、良い意味で神の裁きに畏れをもって取り組まなくてはならないのです。このことを、今日の聖書の言葉から共に聞きたいと願います。